

平成28年度 新潟市音楽部 活動報告

部長 三浦 美也子

1 研究主題

聴いて 感じて 考えて 音楽を楽しむ子ども

2 研究の概要

研究主題の『聴いて 感じて 考えて』とは、「音や音楽を知覚し、そのよさや特徴を感じ取り、思考・判断する姿」である。また、『音楽を楽しむ子ども』とは、「思いや意図をもって表現したり、味わって聴いたりする姿」である。

今年度は、今までの5年間に渡る研究のまとめとして、主に「音楽づくり」における有効な手立てを明確にし、実践および研究発表に取り組んだ。8月17日に実施した市小研 研究発表会では、有効な手立てとして以下の3つについて発表を行った。

- (1) モデルとなる音楽の提示
- (2) [共通事項]の焦点化
- (3) 音や音楽の可視化



3 研究の実際

新潟市を3つのブロックに分け、ブロック研修と全体研修の二つの柱で研修を進めてきた。ブロック研修では、部員全員が「音楽づくり」を実践する一人一授業研究を行った。全体研修では上記の「音楽づくり」に有効な手立てを中心に研究発表を行った。

(1) モデルとなる音楽の提示

モデルとは、子どもに考えさせたい要素を含んだ演奏、目指す音楽の方向性を示す演奏など音楽をよりよくするためにはどうしたらよいかを考えるきっかけとなるものである。モデルを提示することで、子どもは、ゴールの姿をイメージし見通しをもつことができ「こんな音楽をつくりたい。」という思いや意図をもち、主体的に音楽づくりに取り組むことができる。また、教師が子どもの表現を価値付ける言葉かけをすることもモデルとなり、さらに子どもの主体性を引き出すことができる。

(2) [共通事項]の焦点化

音楽を形作っている要素の中から、その時間のねらいに沿って[共通事項]を焦点化することで子どもの思考の手掛かりが明確になる。その際、「反復」を「まねっこ」、 「問いと答え」を「おしゃべり」と、子どもが捉えやすく、分かりやすい言葉に置き換えることで、子ども自ら[共通事項]に気付いたり、その働きを捉えたりすることにつながる。

(3) 音や音楽の可視化

音や音楽は目に見えないものであり、一瞬で消えてしまうので、共有したり再現したりするためには可視化が必要である。そこで、音高やリズム、音の重なりなどが記号で書き表せるワークシートや教具を工夫する。また、書いたり消したりできるように工夫することで、グループで話し合っ試したり変えたりすることもできる。可視化の手立ては、子どもたちの話し合いをより活発にし、関わり合いながら学ぶことを可能にする。

4 成果と課題

「音楽づくり」に焦点を当てたこれまでの授業実践を通して、3つの有効な手立てが見えてきた。授業の中で見られた、進んで音楽に関わり自分からアイデアを生み出したりしながら友達と協力してよりよい音楽を求める子どもの姿は、思考力・判断力・表現力が発揮された姿であり、音楽科における「主体的・協働的な学び」の姿と捉えることができる。また、140名の部員が、一人一授業研究において、有効な手立てを生かした「音楽づくり」を実践し、授業力向上にも努めた。来年度は、得られた有効な手立てを「歌唱」「器楽」「鑑賞」の活動にも生かし、さらなる成果を明らかにしていきたい。